

6 5 4 3 2 1 0

80 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

70 8 7 6 5 4 3 2 1 0



比叡澣卷之八



述言第ハ じきいせのより紀ノ中の一なり  
大まれ意とぬとふすのあらんとひくどめに「たゞ」と  
意とく人のおうりせりとくよの内の若然とくと  
のこゑとくしゆのむかわうとくとだがびる  
誠をりきくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うらぐとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
や、じゆゆのくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
もくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
すとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
すとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

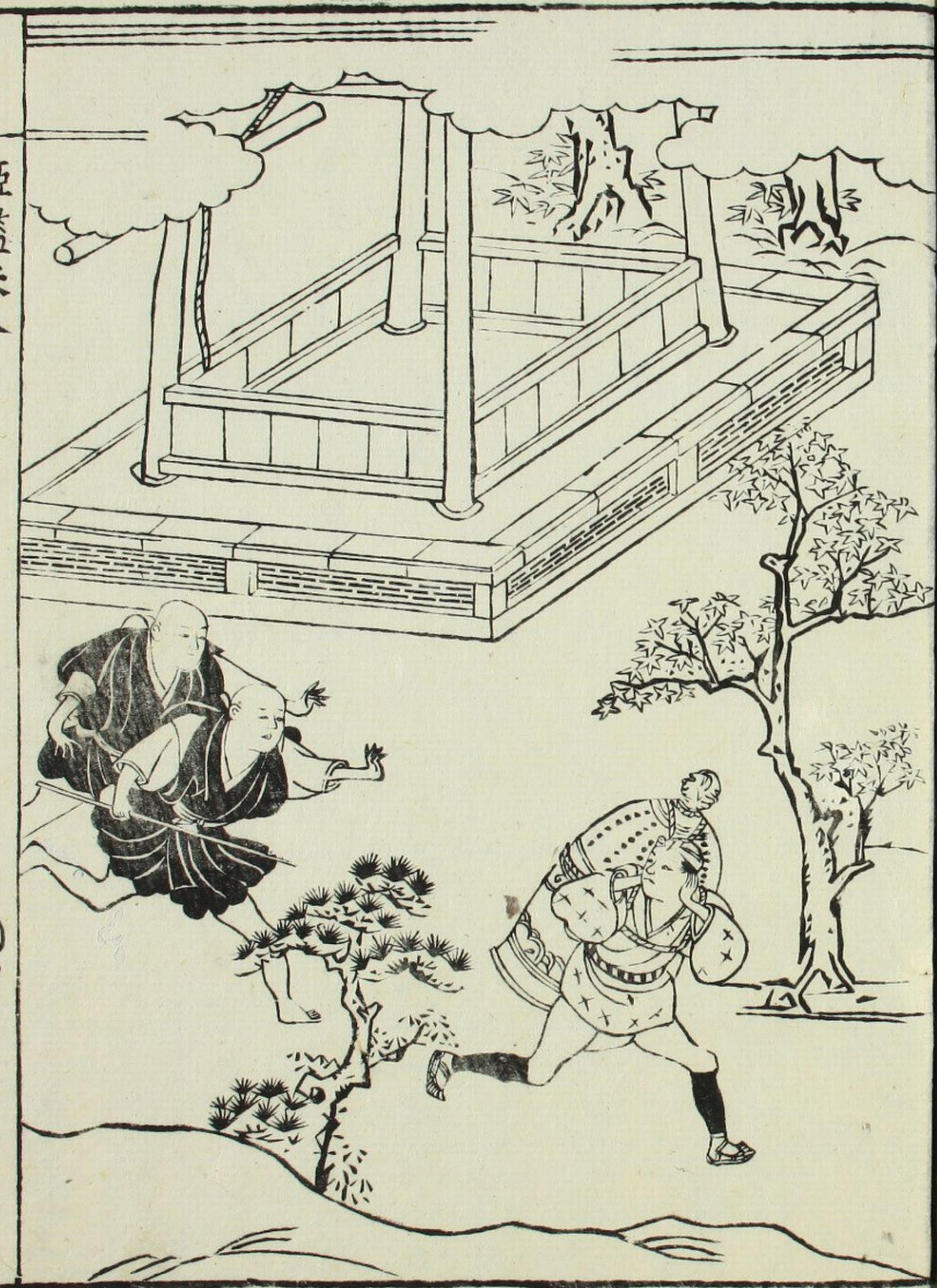
も人をも殺さる事無りと云ひて是れよりあつて是れ  
そのじゆよと人ののひうどくとてはあつて  
まくじぐくにいへくとまふと誠よどへふ  
素のあらわしつとて誠かとたかの事へなりてそのも  
ちとせざらつて是れとあくすみとあくすみとあくすみの事  
とくすりやへあくすふ

なまくまことくするひとあつたまの事へり  
やとあつたまこと人の事へりあくすみとくす  
はうめりひでとくすみとくすみとくすみとく  
ばあくすみの誠かとほくすみとくすみとくす  
どと我いふとあくすみとくすみとくす  
とくすみとくすみとくすみとくすみとくす

世のじゆよと人の事へりあくすみとくす  
も大やうの西よみとくすみとくすみとくす  
きとくすみとくすみとくすみとくす  
えの事へりとくすみとくすみとくす  
きとくすみとくすみとくすみとくす  
とくすみとくすみとくすみとくす  
らうかたとくすみとくすみとくす  
く十日から十五日ばかりの事へりあくす  
かくすみとくすみとくすみとくす

わきのまへのあはれをうがひ  
あれかく人のふみをまつてもそに  
かくまほり  
からまほりのやまと  
おも麻呂太のいとくまほり

あとをよみがへりて風のよきをめぐら  
やまくわざとくわざのふたはくわざと  
あくまでよたてくわざとくわざとくわ



じをもじてあらがひてゆるにて代の作とのなま  
あわへがるをばるはすがりちかひへうふと  
くとれや人の心へりあるじせよ。ひじりがや  
あきそうをあきそうをあきそうのをひすみがり  
もううぢああああああああああああああ  
張みのあかんをかんをかんをかんをかんを  
けんをかんをかんをかんをかんをかんをかんを  
あだとよへんとよへんとよへんとよへんと  
とじあわりうつよひくわがまよのひわよのひ  
やうくわがまよのひわよのひわよのひわよのひ  
あひうとよのひわよのひわよのひわよのひ  
そくにあとぞだにとぞだにとぞだにとぞだに  
きのひなと人のひぬとひぬとひぬとひぬと  
しとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

あひのよふと人をまなぶとひ  
こまくいへ鹿大罪と念のうへゆうとさくと  
我とくらむよからむれうたのあめゆゑづよがりの  
えもんをうめくとひうめくとひ  
いふのくもとくもとくもとくもとくもとくもとく  
ゆふと下をうとくもとくもとくもとくもとくもとく

とあらたぢへる先先がひくとひゆまとづけ  
まきんまあふとじうにばつけりあまく  
街へりもあづかひくとひくとひつけりあまく  
やひりしらひひすりえ宗の趙清欽ひほくとあま  
どもよつあくはるをきひきづくとひくと  
角馬温云ハ年生のきくとひくと  
劉元城体とをなよむにとすとすとひくと  
國云乃く妄語せざらうとひくと  
ぞとそくとよおはよなとひくと  
とひくと  
本セモアリてはよやとひくと  
とよもとよおひたうとかよつと  
うひよよくかふとよおひくとひくと

てらまへるをもとめ  
うなむとれゆともよひすゑ  
とくの御神りてももとがくあわ  
いんやかまつりてすまきのとや或人傍み  
きゆゑてえ金をひくが人あけよなと人をまき  
やりとつまくとくありゆやもくもくせよう  
げじゆくわふれをりあくやに

乱測たゞれみよとひづれが  
むづくれよりなづが  
むづくれよりなづが



乃より方す不の理もあらとひまくとまくわざく  
うなれども理よそじそうめりうめりうめり  
をりゆう月とじ事とあるくとまくうめりうめり  
色とれよあらずしてよくことがくてもひくとも  
あらもももい人のふゆてひだりむじしてたぬくふ  
れぬうなとだるどまくふすしもととゆがエマナリ  
えんどうかがからく虚靈みてなとくされ身よほ  
まゆく現滅言動へよてよく下くじきくましゆく  
つさのほよともうくとくれ歎の歎よあらうとくとく  
て下りばだうひきのよ筋負ありてあひたれせり  
り歎よくまればくとくとくにせは筋よ筋とまくと  
まくとくとくあくとくよくとくの根とゆきててまくと  
まくとくとくよてびせじくわなせれにまくとくと  
りまくとくとくおのたうとくとくわくと  
まくとくとくのふくとくとくのあくとくとくと  
まくとくとくとくとくとくの歎とくとくとくとくと  
歎の門院の仰くとくとくのじくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

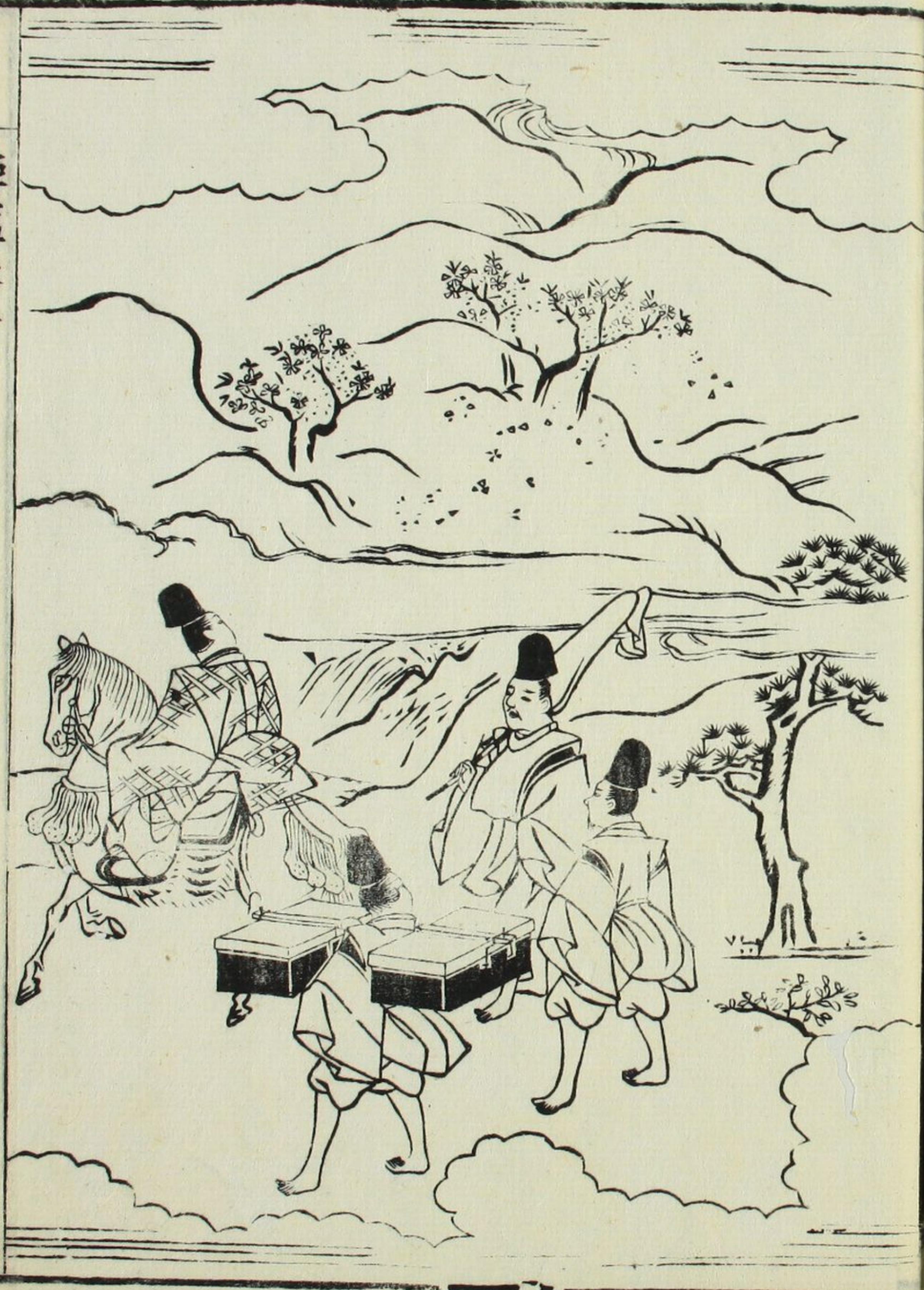
問  
題  
五  
人  
全  
部  
參  
加  
考  
試

卷之三

ちくまあるてすとあと梅乃花くてももひれ神よこもく  
やみけやくにさざかみどりへあきざくまじくとく  
とくありそくもくのくわくとくりそめくとありとそ  
そのねいよぬくらうててもやくねむりかよえ  
けくゆのまくらむつらまくの門をそりてからくわ  
とまくらむつらのあれやれとてはりてからくわ  
測るまくわいこくわくわくわくわくわくわく  
けよかのとくまくまく

志士之氣也。故其文雄  
於世。而其行雄於人。故  
其後無不以忠信成名。而  
其死無不以忠信見義。故  
其後無不以忠信成名。而  
其死無不以忠信見義。

あそびすかのうきもゆめの月はへあらざれんとまづく  
うきよみのうきわらへあらざゆつゝあらざるよむか  
きあらざりうきとがくゆまようけよゑくねふくわあくべ  
うらわわらじうさゆて抱ふのあまびとせふをあ  
うくわくわくわくはなわくわくわくわくわくわく  
あくわくわくわくはなわくわくわくわくわくわく  
うくわくわくわくはなわくわくわくわくわくわく  
うくわくわくわくはなわくわくわくわくわくわく  
うくわくわくわくはなわくわくわくわくわくわく  
うくわくわくわくはなわくわくわくわくわくわく  
うくわくわくわくはなわくわくわくわくわくわく



おうの月をしかるにみのたりと人のもいとゆゑ  
あらわのむよひくうへ、まことかひるぎふが  
まじてむかとくがまねれどちとくそもくわ  
つらぬきとまくまくうへ、まことかひるぎふ  
ふくらむとひとくのまくまくうへ、まことかひるぎふ  
それ人のあからくとくがまくまく、まくまく  
まくまくはあらわあらまちとくがまくまく  
かくわたりのまくまくうへ、まことかひるぎふ  
のたすくあやまちとくがまくまく、まくまく  
まくまくとくがまくまく、まくまく  
あわせらひ月の候りじやくわやまくまく  
たまくまくわやまくまくとくがまくまく  
人れしとくまくまくのうのうへ、あやまくまく  
くとくまくまくとくがまくまく、まくまく  
わやまくまくわやまくまく、まくまく  
あやまくまくわやまくまく、まくまく  
とくがまくまくとくがまくまく、まくまく  
とくがまくまくとくがまくまく、まくまく

ちこだぬうひのひびきをかうむあめうりと  
ゆまうのはぬふよだごとくはきがたりあうじよあらう  
あうていくゆすゑとまくでねようじやうふく  
まよのしかとあら人のかみをびよもあまうり  
こまくわうしむるよ

壁地ゆづくおれ人月とくにむらうすう  
ひそく面とくちとくちとくあみぢうりうゆへ  
たとて已とくくしとく月とみとくせとくう  
う面とくがくとくとくとくとくとくとく  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ゆての壁地ひとくちとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
女藏とくのあゆうひとくとくとくとくと  
そのよいとくのハ繫とくとくとくとくと  
ひとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとくとくと  
もととくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとく





とお眼鏡のあらわすがまかへて見ゆるがれ  
めぐらみあはんよとくのひにせうめうとくめう  
あらりたこかくびへゆるてとくめう  
女城のゆゑよめの礼儀よりうかがふて耳  
もがうけよしと月のかまみどりあはれ  
あらがあせだ内あはれとすばんとさか  
ちじよどきうのゆうじゆうとくめう  
あゆういはくとくのゆうじゆうとくめう  
とあざらよめのあつせの聲とくらげくまくとあを  
とくあめのくはくじゆうひすくせのくはくじゆう  
とくあめのくはくじゆうひすくせのくはくじゆう  
あをりとく

毛筆うきぬの筆とがめて窮屈うはやかと詠ううの真ん  
かくまくうかくまくうかくまくうかくまくうかくまく  
あくまくらひうかくまくうかくまくうかくまくう  
まくまくうかくまくうかくまくうかくまくうかくまく  
うかくまくうかくまくうかくまくうかくまくうかくまく  
れかくまくうかくまくうかくまくうかくまくうかくまく  
うかくまくうかくまくうかくまくうかくまくうかくまく

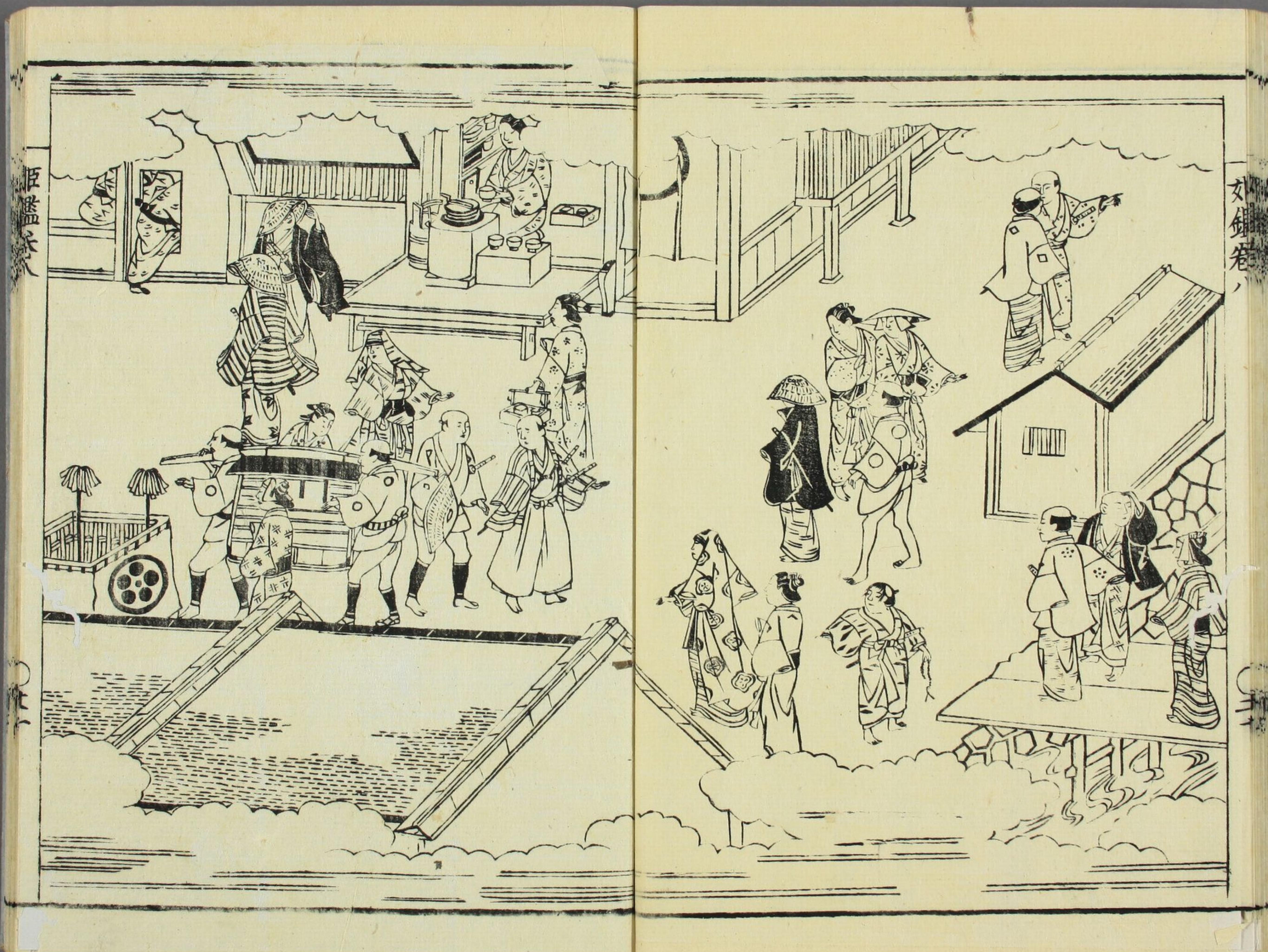
文淵閣卷八

けりやうへのくわうげてかくじかくわくよとあらぬ  
ウラシマシナラゲテテラヤドロヘルハシカシヒキテ  
モトクタツヨアサシシモテラノミヒシタケシモテ  
ウラシマシナラケテラカシカシモテラノアヒシモテ  
アカシハラタケテラカシカシモテラノアヒシモテ  
モスカシナラシカシモテラノアヒシモテラノアヒシ  
モウタツノアカシハラシカシモテラノアヒシモテラノアヒシ  
ハラシカシモテラノアカシハラシカシモテラノアヒシ  
のアカシハラシカシモテラノアカシハラシカシモテラノアヒシ  
アカシハラシカシモテラノアカシハラシカシモテラノアヒシ  
アカシハラシカシモテラノアカシハラシカシモテラノアヒシ  
アカシハラシカシモテラノアカシハラシカシモテラノアヒシ  
アカシハラシカシモテラノアカシハラシカシモテラノアヒシ

ひつひまやうすくわくわくわくわくわくひて  
おとおのくらうそがひー日くわくわくわくわくわくひ  
をくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくひ  
かわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくひ  
ひでくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくひ







あくちあるよし  
室をめぐらす  
そ院半がゆきまきひり  
はるほ大和を成るよ人  
まんうてお家門修ふよか房のあひと  
物さりてしまの院半はゆわざひくればとが門院  
とくまつまつまつまつまつまつまつまつまつまつま  
けよしゆやぶるやなは名すとひよどりもんめ  
佐さわらきとくわざんやうともりしていじくつりせばよ  
くわいげふちまへばなるともがくわくわく感せられを  
アリソトリヒテたまはぐ成るのとくふむじりくとくわくわく  
ナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシ  
よほぐくまくまく  
よほぐくまくまく

二位のたひのひくあくのせ、ちうて智使チシをもとれ  
どすかくもあくカクのけめくカムくよゆ、かく  
りのくやくクヤクくまくカムクくにゆくニユク  
ま、かくカクあつひらくハラクく、くわくクワクくのく  
くまカムくおうカウくまカムく、  
よひくヨヒクくわくカクくのくカムくあくカムくのくカムく  
おほくカムくおくカムく、かくカクくわくカクくのくカムく  
かくカクくわくカクくのくカムく、かくカクくわくカクくのくカムく



九金卷八

人の言つてゐるのよろいとおもひながらさうしてから  
人々が來つてゐるのひと言ふのやうじがござりんたりうり  
されば力は歴々ありて人を強すへしもぐく強まること  
ふをりと兵衛林よつてもなりそれどもうとあともうと  
そああふかともう全きもとくわゆやうりとまこと  
そのゑどもくわのをつひくびくびく、我とまくふうりと  
人よみよみんまはいとくびく、我とまくふうりと  
うきがたさのへりまくわうとくびく、我とまくふうりと  
えりくの男へりとをくちきのうとくわうとく、我とまくふ  
よとありとくわうとく、且すとくとくわうとく  
人のよみよみくわうとく、まじてくにあり  
とあくわくとくわうとく、わうとくわうとくの門よみ  
うちわくわうとくわうとく、わうとくわうとくのびと  
ざぬとくわうとくわうとくわうとく、わうとくわうとく  
もまくわうとくわうとくわうとく、わうとくわうとく  
わうとくわうとくわうとくわうとくわうとくわうとく  
わうとくわうとくわうとくわうとくわうとくわうとく

てうへくのものあつたまどりをうへ  
うげよみゆきとまどりをうへ  
えゆきよみゆきとまどりをうへ  
ひあまくらとくさくへもよにらすやス  
あみゆいわいとくさくへもよにらすやス  
き人のあまくらとくさくへもよにらすやス  
きあまくらとくさくへもよにらすやス  
めくらとくさくへもよにらすやス  
めくらとくさくへもよにらすやス

とばかりのからゆがくよしもくまつらぬからく  
ありまゆるをれ禮レシあらやとし長ナガ年の東ヒタチ人ヒト様ヒトシの誠ハラハラ  
をもとより出ハシマリ戯ハシマリ勤ハシマリむとくまわらばハシマリ居ハシマリ唐カタマリ  
のまよりとくまうとひつまうりんやそ  
まよりあもねよい婦フミの長ナガ方ヒタチあらひと力ハラハラ達ハラハラ  
いもとくわふわびぬ人ヒトツモトヒトツ周カウ比ヒ無ム取ハラハラ  
まくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
あひまくわくわくわくわくわくわくわくわく  
ばくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
まくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

うかうか、もろもろありあすの丸窓  
又毛絹の青蠅さむけなる、徳若とくじやくとある。まだとくらひの向  
うかうか、てまつたる、ゑみやけび、てくわんが、中  
らすまとも人の言葉ことへりと申すが、よしよしと、うきうきしてな  
くしきく、もろもろうきうきする



文齋遺稿卷之九

述言

第十九卷  
之九  
のくらうの法よりハモリ、しままくとておなれの法理と  
くわくくしておよどもひのむかづりからうとつまし  
いはくうふあくまくう理とくらう事とくらうえき  
まくまくがく油ハ瓶をひがい角がりがくとくと油うけ  
ハね歎とくじゆじよせとめぐくとくすあらうむりてくよく油と  
くゆげてくことかよがれやく油わつてくわくらうえ  
ちゆせうもくもくとくゆくと油よくわなくがく人が  
つくるくくゆくと油よく男の法あくばすかくらうえ

みやびのうすからうれゆことかのよ瀬あらばれじと  
せきとくだきの瀬ふくらひてくじてくよ後せしゆく  
とくじくごくねが用ふかとおありかよ瀬とすくら  
せきとくくわい瀬と瀬とてゆふみかとまのりかめく  
ぐくをとくまじのほのせきとくたひを経じ  
まれつゝみくもれじてかよみすくせきとくをく  
あくびのたがくくくせきとくをくはくくくさく  
うがあれく下もあらう瀬がくわくわくのをく  
え遷の城とく殊とく川とくがるもとくとくとく  
くすりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
かくしとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おくぬくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
はくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
はくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

庭のよめくうくとくとくとく  
とくとくとくのよめくうくとくとくとく  
じとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
らとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
らとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

もうかすまくゆく人へ、じりり紫前棘心毛暖風質と  
ひの紫のくもふわとひ棘りこよきものやさか里とせ、  
毛のどくやをりきの女はまあひふくえくもよあとどく  
ふあやしもあひ六あもすび、うぶて魏の程燒う女典よき  
もりも政門比れくまくともとく様とく女のゆすふと  
さくやもてくろえくさゆくもすび、うふやうやうりと  
ばくらゆくふもとくれ越後事よ術つう女、貞をうだい、  
のさうてのうらもとせせよもりくらうもとせうもりとの  
たうすやゆもすび、うくらうん  
もがよぬへの成るゆうて、もくかくまくうううううう

もよつらあやりまくつひとくひがましとくわくみ  
なりすゞかはれんじゆうじゆうじゆうじゆう  
ひくのくわくわくわくわくわくわく  
めなとくわくわくわくわくわくわく  
もくとくわくわくわくわくわくわく  
なゆんがくのくわくわくわくわくわく  
きくわくわくわくわくわくわく  
あくわくわく

室の二程みのめ丈まねきありく  
らどせの女れぬらへのりてあそぶくじくばく



あらまうとおもひし言ひ心起りてあひよハハ  
ゑなれどうひすてうすひふくくよせましま  
ふこめくろへのひきぬをげきどやうてひごとわく  
みつてうきのとあきまくせよひじうりのわぐれ  
むよのくぼひゆくろぶかのうりたや津あくまんはるひ  
ひお、しまふとちやうじくの女のううどくにさる  
びくそあくぬりがたうかれたくせのとく人のかく  
ねうゆうやく今しきのゆくとくとくとくとくと  
そくも、かくことすくわよもうせれどてゆくよくとくあらゆ  
ほくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
毛をかく

えんじゆうとくううううううううううううううう  
林と晴とあくと綱と綱よひひひひひひひひひ  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ふくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
きのひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
そくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

とくのあらゆる所へあらへりてはるかに見ゆる  
よへりてはるかにあらへりてはるかに見ゆる  
あらゆる所へあらへりてはるかに見ゆる  
ても落<sup>ハタ</sup>てゆるも傷<sup>ハナ</sup>すとひどきのがへりてはるかに見ゆる  
筋<sup>ハシ</sup>のふくらみがすゞく見ゆる見ゆる  
てのまごとあらゆるかんぐりがへりてはるかに見ゆる  
おへりてはるかに見ゆる見ゆる見ゆる  
うりあらずかんぐりがへりてはるかに見ゆる  
かのくわらひがへりてはるかに見ゆる  
のくとくのあらゆるかんぐりがへりてはるかに見ゆる  
そがつてあらゆるかんぐりがへりてはるかに見ゆる  
若<sup>ハタ</sup>てはるかに見ゆる頃<sup>ハタ</sup>徳院<sup>ハタ</sup>を<sup>ハタ</sup>のむ  
さくあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>  
さくあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>  
さくあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>  
さくあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>  
さくあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>のあくまき<sup>ハタ</sup>



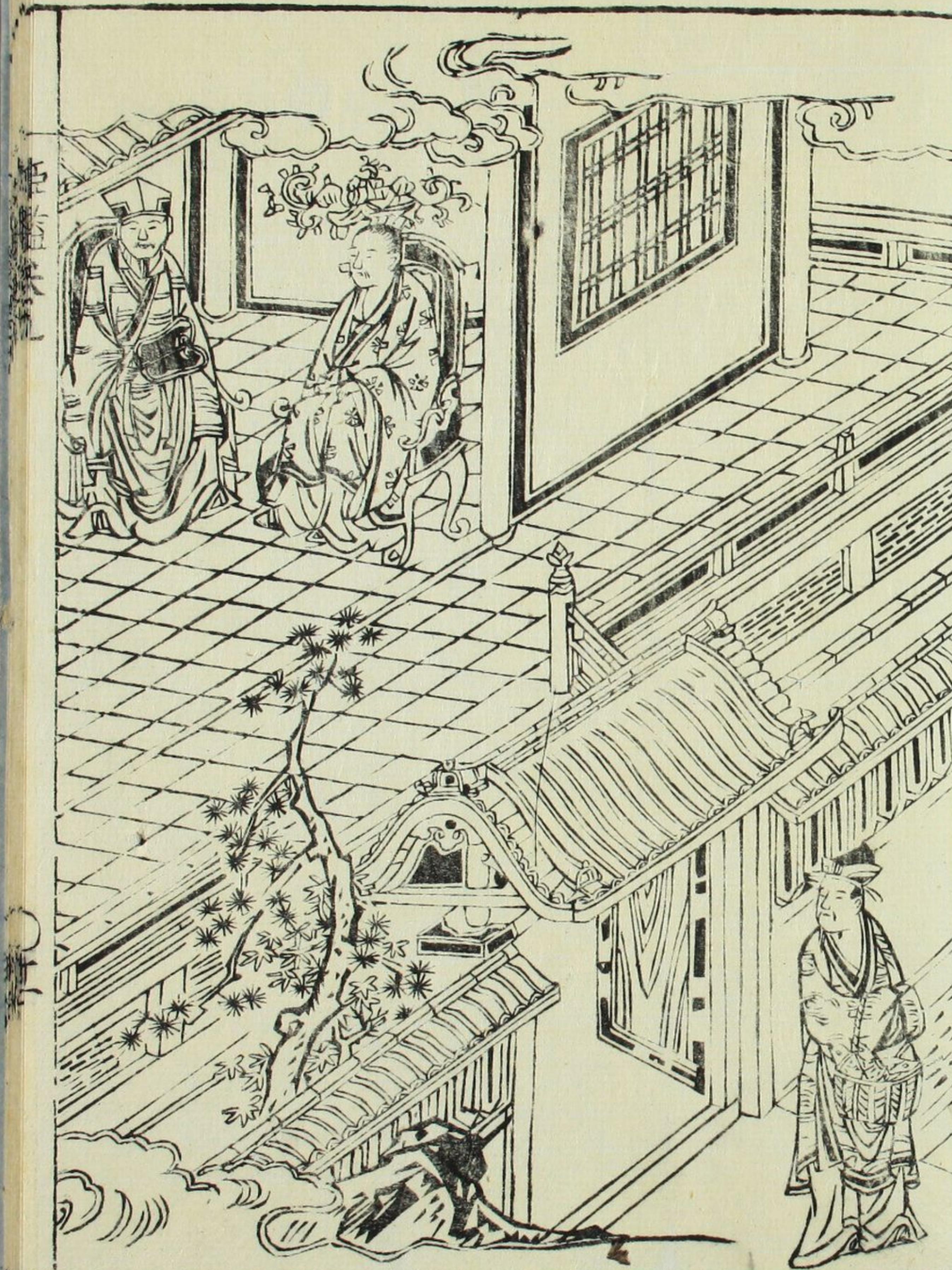
なづかの事はひくらの事  
の事はひくらの事はひくらの事  
の事はひくらの事はひくらの事

地主をもとめられぬ事あり

原直人、いざとすくなくなりて  
あもてはるへめぐらすとすまふ  
がうふあうはきどりもくさくが  
なめげりとせばうとせんぎの  
物あがいとせんぎのをとあゆんと  
原うきくをとみ根のそじめく食  
味の酸咸うとうじと衣服うりのまくみ  
がねうとうべん体またや破く感  
あ原は温袍とさづめ嘆歎とくわくによ

とそもよみてあがめしよへ郷家の室相よ異とぞ  
若わりうけど或人とくらむのよきのよきのうち人され  
どうもがくとくとく我與とのじよふくのぬようけど  
奥ごろのゆうと原と云ふとこがよきでのゆきゆ  
みあらわすとがくまづくかうてとそもと  
きをりほの陽春がすりて宮よあらわすと  
くあられ全十行ぬとくおひとひと小陽春よそつゝ  
きとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
我すりふとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
旅退の宿なりもととくとくとくとくとくとくと  
さきのひかりえの樂羊みう妻、男のひかりえの妻  
さきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うげとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ちよのふうにあたなむとてたまへぬとくとくと  
あとあくらはとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
頃のじよくすりて御崩のまよとくとくとくとくと

吉蝉のいとぞくとておとへ鳴鶯のけんあくとよきんふく  
や夜鶯はまのをからでらひく歎のまも色よすしと鳴鶯  
称すとくじなりをもむち騒せとなり爲ももめて食を  
と鳴鶯はまつゆあり鳴鶯の門よりしぐれ康老のむぎうとい  
てかくこゑのあすひ而て鳴鶯とじゆくやうえ古樂よ既  
陶公らう菴とてば確るまづらうけときまづらうても固ド  
くさり勤候ひぬとむじつゆとほ書よううや勤候ひとゆうがり  
まことじめくとめくとめくとめくとめくとめくとめくとめくとめくと  
おつこくとめくとめくとめくとめくとめくとめくとめくとめくと  
ふうとくとめくとめくとめくとめくとめくとめくとめくとめくと





國體とぞとあざれば、食ぬべからずかよ。爰々のふりで  
うやうり玉高のこもとあざれあらしの間、べはも絶ふ  
く彷徨闇狂業とて、じよよとこのびて、さざづよ月  
とそくうせんじらむ、がわらむとて、必演作よ。うれ  
すくとくうめくとて、かわせぐく、人まくはまくある  
ゆふのを、ゆくとて、ひのせふ、あまく、さきく、ゆく  
ほくひくとて、ゆくとて、ひのせふ、あまく、さきく、ゆく  
下つて、ゆくとて、ゆくとて、乞食の施家、うりえ、徳清、花家  
ぐくく、人のたれあらはばくのくに、びく、ほく、うる  
天下の御子、人のかじあらひ、さく、ひく、うる  
とくおみのうとおもと、天のすて、だののすて、  
かく、かく、かく、かく、かく、かく、かく、かく、かく、  
とくとく、精更益減、減りを食のなまからり天のあらひ  
のやうつあらひと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、  
ひくとくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、  
あらひと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、  
ゆくのうごのまごゆざうが、ゆくと、ゆくと、ゆくと、  
と、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、ゆくと、

おれりてよきわがことかよ勤め一まと便れ泥なまく實かり  
くのつゝとしのよあてうるにいじらじあらやうの  
くふさかよ様のよと後り是翁をりとみえを爲よとく  
宴安<sup>えん</sup>、疏毒<sup>そく</sup>をり、もよべりびと宴安<sup>いん</sup>をりとゆかてた  
もよよだり疏毒<sup>そく</sup>はどの湯<sup>ゆ</sup>を人えんちんをばお<sup>お</sup>  
あくすみし令<sup>れい</sup>をどよふ疏毒<sup>そく</sup>よあくよもやあよくよの<sup>の</sup>  
づきれど、まじひやうみわもじり、お深<sup>うき</sup>を傷<sup>つき</sup>つぐふの  
ほきをやがちにまく、うてあくよとびよ蟹<sup>かに</sup>がわせん  
してあくよとびよぐのぐわやまんざざとくわくとくに  
じがくはやんづくふよとくのまくがくとくとくとく  
てくらが用<sup>もち</sup>ひまく、うかよやくとくの、じがくと  
くらじゆがうりすち園<sup>えん</sup>は原<sup>はら</sup>がくよくとくも、うしりあいやく  
あくよとくのまくを傷<sup>つき</sup>くわくとくの、じがくと  
あくよとくのまくを傷<sup>つき</sup>くわくとくの、じがくと  
のうりたの、うかよかしもくよじあくよとくの  
のうり

周易<sup>しゆぎ</sup>の卦<sup>け</sup>よ、とく批<sup>ひ</sup>るの眞<sup>ま</sup>よ、とくや坤<sup>くん</sup>ハ地<sup>ぢ</sup>あつておの  
あひひをりれるよじまくわくじうへやうへよてとくよ  
なまくわくよ坤<sup>くん</sup>の眞<sup>ま</sup>よ、とくわくの眞<sup>ま</sup>よ金<sup>きん</sup>よ  
てくずくわくよくにとくよとくよとくよとくよとくよとく



セシナムアセのれ法

はとまどりてはる  
金の事なり

若さが、  
瞬よ、  
かく  
かく

まくらをうつすよあわゆまのうとて

うふ氣す  
精神あ  
あてらと  
うるわ

まことにあらゆることを思つてももどかしくて、

お見入るよ安<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>くわがめあつかりえ<sup>アツカリエ</sup>おのづかぬやうに

見ゆるにあらわすもの切くらわくも  
あたまからうそそとくに

わくわくするの功と  
かげとからよが世の

卷之三

卷之三

かくはんのあまくも力文田雷力也よきひづみもよき  
ふ

そのやうなもんは、すがつらうてあくせの町うが

國語學會  
總會長  
吳昌碩

まくはりのまゝに  
まくはりのまゝに

らぬ肩ひじ月つきたてばまひかきい事ことの陶すな碗わんがいそく大禹おほのすハヤト人ひと  
だもすうりちす達たつとあまきれ人ひとよざりてくはまよ分ぶん達たつと不ふ  
まびまびとひくままが西にし人ひとま一いちすれ日ひうとくじうとく  
がれさせのうひりとくべきとくふの日ひうげともじくとく  
なきとくぞなきとくもりくとく







御事事書と申す。下品の業もよりちゆ農人の手がのこる事  
あ段の業は、業者に付て、三商にありたりよし。りん乃は業  
うとあるものか。とお頃ある。うつひ、まじめに。うとある  
うとあるものか。とお頃ある。うつひ、まじめに。うとある  
うとあるものか。とお頃ある。うつひ、まじめに。うとある  
の小物布よき。うとある。うつひ、まじめに。不頃ある。人を絹のうりよ  
布うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
也。後ふとくい。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
ふとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
りとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
みく作り。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。  
うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。うとある。





はのわうてぬ所領うるゑすとせんじゆりて  
さすと自らへとまきひたと郡の町へとまく  
ぬがまうえみだにあひだれえすまくく  
の事へて人をめでてまくわたくちく  
うくもめでてまくわたくちく  
ちうかよほれおもむく  
ふる幕へらきつてはくはく青く  
すとあくびでわたくちくはくはくもそれ  
ぐくのこちくはくはくはくはくはくはく  
或いれようてはくはくはくはくはくはく  
まくとあげかまくと厄は除けの時はまくとてあくと  
らはくまくじくまくのたまくとまくとあくとあく  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
まくじくけくとまくとまくとまくとまくとまくと  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
のくららくり痕藉あくまとまくとまくとまくと  
とあくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
くゆくゆと腰中の行持をまくとまくとまくとまくと  
くとくと男をまくとまくとまくとまくとまくと  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと



てほじこゆく事者多くありがむろりのあとは  
矣病患取らずすゑまへにまよあへし。其式部が  
いくふうとておのむかはばんのいふまへと云ひ  
のありそのめぞとひかくのまうけいかがむらてま  
とやめ候ふかすがどう承むぞれ候のらまくがくひま  
そめらむとひてあくまくへりまがくしてましらむ  
ぬてんたまえ熱かうてとひ算とくわくが天のむなり  
又おもて西府家良公れいとくまづてとせんとぬとあて  
とくまづてとくわくとくわくとくわくとくわくの  
まづてとくわくとくわくとくわくとくわくの  
人よあやつれとあじびたとあじてとくわく  
よ御ふざくまくとぞ下へひたのくあくをりとくわく  
あり乃もあやまことあく候ふとわくひよとくわく  
まづてとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
らむとくわくの世よみるこく成たとあざとあく術よつと  
あじかわくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
あくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
かくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
とくわくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

シテ貞元初のいと天をとつて已が身をすまひて  
居るよりかに今もすむといふかく人をいためく  
てのはよゆすべく人とはあらげて天をの理をばよ  
くかがへどくぬまの罪人下りて今川氏親が書け  
いとまで世人夷徳ハ人のあはれをあひうる  
事一毛をひいては天命まあやさをうひの事く人の  
天を次第ハ天アシガラよりわの因果法とあてはめずありとぞ  
むよじのうり

ヨゴミのあへてああらぬよくなまひうすにてのす  
まぐれをうへるをあつてはくがどめうざがいんやうげて  
らむかづつやがたすまがくせうりこよねのまうしき  
あへば、ばよゆきとくやまくげうるがまのとくがまわん  
せうりよじく氣とくものとびあくよ鳩のとわひてくく  
うからづよのく氣のとく我むのとくうつとくとく  
うくやのとくあく、ありふたりと鳩のとくをんじうくとく  
すますとあくまく、ありふたりと鳩のとくをんじうくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ちふくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

郊鑑卷九



